

4) 麦同伴栽培（導入のポイント）

①前植生処理

前植生の雑草（地下茎型イネ科雑草、ギシギシ類など）は、は種前には再生（または実生発芽）しているため、1 番草収穫後でもかなりの被度を確認できます（写真 V-10）。

地下茎型イネ科雑草の場合では、1 番草刈取後（麦跡）の裸地に繁茂するため、グリホサート系除草剤による耕起前（前植生）およびは種前処理（埋土発芽個体・再生個体）の前植生体系処理が重要となります。



写真 V-10 更新前除草剤の有無

②は種作業

麦は牧草と比較して種子粒径が大きいことから、ブロードキャスターによる麦・牧草の同時は種では、播きムラの発生や覆土の状態（浅い・無い）により、発芽後の枯死や発芽ムラの発生が多くなります。砕土・整地後に鎮圧 → 麦は種 → 浅い覆土（軽いロータリー耕）作業を 1 工程行うことで、麦は種後の発芽・定着が高まります。

作業工程の削減や、は種後の出芽・生育を考慮すると、麦のは種は専用機の使用を推奨します。麦は種後、牧草は種後にそれぞれ鎮圧を行います（写真 V-11）。



写真 V-11 麦は種後の覆土（ロータリー深 5 cm）

③収穫

収穫は、は種後 70 日前後、5 月上・中旬は種、7 月中・下旬収穫が一つの目安となります。収穫は麦の乳熟期収穫で乾物・栄養収量が高くなります。

刈取時の麦は水分も多いので、細断サイレージ調製の場合は予乾時間が短いと調製時・調製後の排汁が多くなります。

ロールバールサイレージ調製では特にテッターのかけ過ぎによる土壌の混入には十分な注意が必要です。再生牧草に対するダメージ減少も併せて高刈りにします（写真 V-12、43 ページ参照）。



写真 V-12 刈取後（刈り高 10cm）

④同伴麦の品種

「エン麦」、「大麦」、「ライ麦」が利用されます。エン麦は、出穂が早く、極早生種はは種後 45 日、中生種で 55 日であるため、は種遅れにより草丈の伸長が確保されず

出穂することがあり、乾物収量は少なくなります（写真 V-13）。大麦は、は種から積算気温 800℃以上で乳熟期に達し、この時期での収穫により自然下種による再生草（野生）も少なくなります（写真 V-14）。

「大麦」、「ライ麦」は耐倒伏性が強く、初期生育が良好で牧草同伴栽培に適します。



写真 V-13 収穫前のエン麦



写真 V-14 収穫前の大麦

⑤その他留意事項

排水性の悪いほ場や水位の高い表層が乾燥しやすい（泥炭）ほ場は選定しないようにします。エゾシカなどの野生動物の食害を受けやすいほ場は選定しないか、対策を講じます（写真 V-15、V-16）。

麦においては、同一条件下では出芽の早い品種が選択的に採食され、牧草ではイネ科のチモシー、マメ科も採食されやすい傾向にあります。

被害を低減するため、更新時および更新後2～3年程度は電牧柵などで対策を講じましょう（37～38 ページ参照）。



写真 V-15 透排水性の悪いエン麦混播ほ場
（葉先から黄化、その後枯死）

○麦同伴栽培のメリット

- ・春更新における1番草の収量確保
- ・更新時1番草の1年生広葉雑草の抑制

○麦同伴栽培のデメリット

- ・は種作業の作業工程の増加
- ・同伴麦種子費用の増加



写真 V-16 シカによる食害（エン麦）